



Cutting-Edge

[カティング・エッジ]

MOVE
この人
にきく

リオ+20は持続可能な開発におけるジェンダー平等を前進させたか

今年(2012年)6月、リオデジャネイロで開催された国連持続可能な開発会議(通称リオ+20)に、北九州から市民の方と一緒に参加してきました。20年前の1992年、同地で開催された国連環境開発会議(通称 地球サミット)は、持続可能な開発という概念を広めた記念すべき会議でした。新しい考え方を得て、それまでの環境と開発という二項対立から、環境・経済・社会の三本柱のバランスと、将来世代という時間軸を視野に入れるようになったからです。

地球サミットでは女性も持続可能な開発の重要な担い手として特定されました。地球サミットの成果文書「アジェンダ21」では、持続可能な社会を作るためには、女性が十分にその潜在的力を発揮し、意思決定への平等な参加ができるように、教育や健康サービス、経済資源へのアクセスを保障し、その妨げとなる慣習や法制度を改め、女性のエンパワーメントをはかるべきことが同意されました。その後1995年の北京行動綱領では環境政策にジェンダーの視点を統合することが加わり、さらに広がりました。

その後20年間を経て、持続可能な開発における女性のエンパワーメントとジェンダー平等についてのどのような進展があったのでしょうか? リオ+20の成果文書「私たちの望む未来」を手がかりに見てみましょう。

まず、女性のエンパワーメントとジェンダー平等が持続可能な社会の根幹であることは再確認されました。成果文書では今後の取組み分野として食料、水、エネルギー、海洋、健康、教育など26項目挙げられたのですが、その1つに「女性のエンパワーメントとジェンダー平等」という項目が設けられ、そこでは指導的地位にある女性の増加、土地所有権などの経済的資源、教育、経済機会、性的およびリプロダクティブ・ヘルスへの平等なアクセス、女性の潜在能力を開花する際の障害除



よしだ ゆきこ
織田 由紀子

北九州リサーチ・インスティテュート 研究所

去、ジェンダーセンシティブな指標、性別データの収集・分析・利用の推進などに一層促進するとの決意が示されました。これらは20年前に既に決めたことですが、さらに取組みを進めることが確認されました。

また、前述の26の行動分野のうち、半分の領域では女性やジェンダーについての言及がありました。特に、防災分野では日本政府の提案によりジェンダー視点の重要性が言及されました。大震災と事故を経験した日本からの貢献といえます。また、女性に言及する時、弱い存在として描くのではなく、潜在能力を持っているのだからそれを開花させるように環境を整えるべきという視点から前面にでるようになったことは特筆すべきです。指導的地位にある女性の比率については最終文書には残っていませんでしたが、目標値を40%としようとして提案されていました。

今後に向けての課題も明らかになりました。第一に、上記の26の行動分野のうち残りの半分の分野では、女性のエンパワーメントやジェンダーの視点に全く触れられていません。触れられていない分野には、観光、交通、気候変動、生物多様性、森林、化学物質など、その影響がジェンダー別により異なる分野が多く含まれています。これらの分野に関するジェンダー視点に立った実践、調査、政策提言が行われる必要があります。また、1994年カイロで開催された国際人口開発会議およびそのフォローアップ会議の成果を推進することは確認されましたが、リプロダクティブ・ライツという歴史的な文言は最終的にはすべて削除されてしまいました。人口問題は人権問題であるとの認識が継承されていないことに危機感を覚えます。

以上のように、リオ+20は過去の誓約の再確認が多く、新しい一歩を大きく踏み出したとはいえませんが、今後私たちが取り組むべき課題を明らかにする機会だったといえます。

CONTENTS

「MOVE この人にきく」リオ+20は持続可能な開発におけるジェンダー平等を前進させたか	織田 由紀子	p.1
「Books ジェンダー最前線」		
「絶食系男子となでしこ姉」(山田昌弘、野内文乃 著)	鶴地山 角	p.2
「公正な社会とは」(宮本裕、杉原隆子、本田幸久 編)	阪井 優文	
「父子家庭が男を救う」(蓮川治男 著)	窪田 山紀	p.3
「東北発! 女性起業家28のストーリー」(フレインワークス/東北地域環境研究室 共著)	足立 千佳子	
「ジェンダー・エッセイ」		p.4
オリンピックとジェンダー 愛称にみる女子競技	岡部 由佳里	

ジェンダー・エッセイ

オリンピックとジェンダー

愛称にみる女子競技



おがべ ゆかり
岡部 由佳里
西日本新聞北九州本社 記者

ロンドン五輪が閉会して1ヵ月半余りが過ぎた。連日連夜の観戦で睡眠不足……という人も多かったのではないだろうか。

今回の五輪でとりわけ活躍が光ったのは女子の団体競技。銀メダルに輝いたサッカー女子「なでしこジャパン」に、初のメダル獲得となった卓球女子団体、バレーボール女子は28年ぶりの銅メダルに輝いた。4年間の努力がにじむ彼女たちの笑顔と涙が、とても印象的だった。

「なでしこジャパン」に始まり、バレーボール女子の「火の鳥NIPPON」、ホッケー女子の「さくらジャパン」、新体操の「フェアリージャパン」、シンクロナイズトスイミングの「マーメイドジャパン」……。数々の愛称が新聞紙面やテレビをにぎわせたが、これらの愛称にふと、違和感を感じることもある。どの愛称も清楚で愛らしい、いかにも女性らしいニュアンスを含む言葉が使用されているのだ。

命名の経緯を調べてみると、これらの愛称は「なでしこジャパン」や「火の鳥NIPPON」のように公募で選ばれたものもあれば、「フェアリー(妖精)ジャパンPOLA」のように公式スポンサーなどが関係する場合もある。「マーメイド(人魚)ジャパン」のようにマスメディアが呼び始めたのが発端となったものもあるようだ。いずれにせよ、競技の認知度向上や親しみやすさのために付けられた。

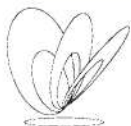
男子チームにも愛称がないわけではない。サッカー男子の「サムライブルー」、バレーボール男子の「龍神NIPPON」など、男子チームのネーミングは「サムライ」や「龍神」など、勇ましく力強い。一方で「なでしこ」や「さくら」といった女子チームの代名詞は、優しい女性像を連想させるものばかりだ。「火の鳥」は多少、闘争的な印象を受けるものの「龍神」ほどの激しさは感じ

られない。これらの根底にあるのは、ステレオタイプな女性像にほかならない。

そもそも近代オリンピック自体、男性を中心に生まれ、発展してきた歴史がある。第1回のアテネ大会(1896年)では、女子選手の参加はゼロ。第2回パリ大会(1900年)から女子選手も加わったが、テニスや馬術など、参加が認められた競技は限られていたという。多くの近代スポーツが、欧州の男性貴族が余暇を楽しむための道具として発展した経緯もあり、アマチュア主義など男性の伝統・文化が反映されたとの見方もある。これらの歴史も踏まえて考えると、スポーツの世界の中で女性が語られるとき、無意識のうちに「女性らしさ」や「女性はあるべき」といった思想が反映されているのかもしれない。

ただチームの愛称は、競技の認知度を向上させる上で有効である。認知度に実力が伴えば人気を呼び、試合の観客動員や商業収入につながることも期待される。サッカー女子の「なでしこジャパン」が良い例である。昨年のワールドカップ(W杯)優勝後、女子サッカーの試合のチケットが飛ぶように売れたのは記憶に新しい。日本に勇気と希望を与えたとして、「なでしこジャパン」は昨年の流行語大賞にも選ばれた。

興行収入が伸び、競技環境が良くなることは、さらなるチーム力の強化に結び付くという意味では、必ずしもマイナスばかりではないようにみえる。しかし、認知度向上の裏には、スポーツの商業化の側面も透けて見える。愛称は女子スポーツを見せ物として、商業化を後押しするツールにもなっているのではないか。愛称を前面に出し、女子チームの「女性らしい」イメージを作り上げる報道を繰り返すマスメディアの責任も小さくはないのではないかと、個人的には思っている。



北九州市立男女共同参画センター **ムーブ**
〒803-0814 北九州小倉北区大手町11-4
Tel:093-583-3939 Fax:093-583-5107
ホームページ <http://www.kitakyu-move.jp>
E-Mail move@move-kitakyu.jp

Cutting-Edge 第46号

【発行】北九州市立男女共同参画センター・ムーブ
【発行日】2012年10月1日
指定管理者は(株)アジア女性交流・研究フォーラム